紀野雅人のいたいところ

さつまいも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紀野雅人のいたいところ

【Ｎコード】
Ｎ４６４７Ｉ

【作者名】
さつまいも

【あらすじ】
紀野雅人が見ている日常。そこにはひとつのお話が。

第1話

「ふぁあ…」

あくびをしながら登校する。朝は眠いな。

授業は滞りなく進んで、放課後になった。

「紀野、はやく行こうぜ」

「ああ」

須藤といっしょに部活に行く。グラウンドに来ると、すでに何人かの部員がユニフォームに着替えてウォーミングアップをしていた。おれと須藤もさっさと着替えてウォーミングアップを始める。と、まわりのやつらがみんな、何かを見ているのに気づいた。おれもその視線を追った。秋吉がこっちに向かって来ていた。…なるほどな。おまえらみんな秋吉に惚れてるわけか。残念だけどな、秋吉は相当な腹黒だ。何度あいつに…いや、やめておくか。第一、秋吉のどこがいいのか、おれには皆目見当がつかないんだけどな。そんなことを考えていたら、いつの間にか秋吉が目の前まで来ていた。

「須藤君。今、ちょっといいかしら？」

どうやらおれの側にいた須藤に用事があるらしい。

「え？　僕？」

「そう、あなた」

少し笑って言う秋吉。まわりのやつらは気持ち悪いくらい秋吉をガン見もしくはチラ見している。

「まあ、少しだけならかまわないよ？」

「ええ、すぐに済むわ」

「わかった。で、どうすればいいんだ？」

「私についてきて」

須藤は秋吉の頼みを承諾して、秋吉についていく。まあ、おれには関係ないけどな。

ほんの少したってから、須藤が戻ってきた。

「お、はやかったな」

「え？　あ、ああ…」

おれが声をかけると須藤は曖昧に返事をした。

「ところで、秋吉に何頼まれたんだ？」

須藤は少し言うのをためらった。

「いや、大したことじゃなかったよ」

「ん…そうか」

なんだか少し様子がおかしい気もするが、秋吉のこともあるし、あんまりかかわらないほうがいいかもしれないな。そう思って、おれはこれ以上須藤に聞くのをやめた。

グラウンドを走っていると、宮下が歩いてるのを見つけた。

「みや…」

おれは声をかけようとして途中でやめた。宮下がフラフラと歩きながら校門に向かっていた。なんかあったのか？　それに、帰宅部のあいつがグラウンドに来ていること自体が珍しい。まあ、今度会ったときに聞いてみるか。そう思って、グラウンドを走るのを再開する。

部活が終わって、須藤と帰る。明日も、変わらない日常がくる。毎日違う事をしているはずなのに、同じ日常をくり返している気がしてしまう。明日も、そう感じてしまうのだろう、と思った。

第1話（後書き）

はい、雅人編です。

ここからは、雅人視点でお送りいたします。

加奈編と照らし合わせてみると、何か分かるかもしれません（笑）

第2話

「ふぁあ…」

今日も朝から眠い。ときどきあくびをしつつ学校に向かう。少し先に宮下がいるのが見えた。

「おーいっ！　宮下ー！」

思い切って声をかける。宮下は立ち止まって、振り向いた。軽く手を振って、宮下の側まで小走りに行く。

「おはよう、雅人くん」

「おう」

側に行くと、宮下からあいさつをされた。一言返していっしょに歩きだす。走ってきたおかげで眠気も失せていた。そういえば、宮下は昨日なんでグラウンドにいたんだろうな。せっかくだし聞いてみるか。

「あのさ、おれ…宮下に聞きたい事があるんだけど」

「え？　わたしに？」

宮下は不思議そうに聞き返した。

「昨日さ、宮下グラウンドにいただろ？　帰宅部なのに」

「えっ？」

宮下が少し動揺したのがわかった。

「なんか用事でもあったのか？」

とりあえず、当たり障りなく聞いてみた。

「ちょっとね」

曖昧に返された。そんなに人に言えないようなことなのか？
やっぱりちゃんと聞くべきだな。

「どんな用事？」

「えっ？　そ、それは…」

宮下は少し困った表情になった。どうやら宮下はさっきので話を切り上げたかったらしい。

「あ！　し、しずるちゃん！」

宮下が、前を歩いていた秋吉に声をかける。秋吉は振り向いて、おれたちが来るまで待っていた。

「おはよう、しずるちゃん」

「おはよう、加奈。…と、どこのおこちゃまかな？」

「おれは子供じゃねぇ！」

「君いくつ？　お姉さん今飴もってるんだ。はい、あげるね」
「だーかーらぁ！　子供じゃねぇっつってんだろ！」
「えっ！？　そうなの！？　私よりもこんなに背が低いのに！？」
「いつもそう言ってんだろ！　毎回毎回人を子供呼ばわりしやがって…」
　なんなんだこいつはいつもいつも人を小馬鹿にしやがって！　こ・ど・も・じゃ・ねぇ！　って何度言えば気が済むんだ！ったく。
「あははっ！」
「わ、笑うなよ！」
　宮下に笑われてしまった。今のおれと秋吉の会話がおもしろかったみたいだ。おれはちっともおもしろくないんだけどな。

　そのあとも、一方的に秋吉にやりこまれるおれ。くそっ…なんでこいつはこんなに口が達者なんだよ！？　教室の前まで来たあたりで、宮下たちの前に出て二人を正面から見た。
「秋吉！　今度子供扱いしたらただじゃおかねぇからな！」
「私よりもうんと背の低い紀野君に、一体何ができるっていうのか

しら？」

「うるせぇ！　おまえがでかいだけだろうが！」

「ま、まあまあ二人とも。しずるちゃんは男子と変わらないくらい高いけど、雅人くんだってわたしより高いじゃない」

「うっ……ぜってぇ秋吉の身長抜いてやるからな！」

まさかの宮下からの遠回しな発言にうろたえるおれ。いじめかよ…。

「どうぞご自由に」

できないとおもってやがる…くそっ…いまに見てろよっ！

昼休みになると、秋吉がおれを訪ねてきた。

「紀野君、加奈が昨日グラウンドにいた理由気になる？」

唐突になんなんだろうなこいつは。

「宮下に聞いたのか」

「ええ」

「まあ、おれが質問したときにあんなに動揺されたら、気にならない方がおかしいだろ」

「それもそうね」

秋吉は含み笑いをしておれを見た。…何が言いたいんだ。

「いいわよ。教えてあげても」

「…おまえが絡んできた時点で、聞くのが不安なんだが」

「そう。じゃあ話すわね」

おれの話聞いてないなこいつ。

「昨日ね、加奈は須藤君に気持ちを伝えて、ふられたの」

「は？」

なんだそれ？

「…じゃあ、昨日おまえが須藤を連れだしたのは…」

「そう。加奈のところに来てもらうためよ」

マジかよ。…そうか…だから、あの時須藤のやつ、少し様子がおかしかったのか。

「そこで、紀野君にお願いしたいことがあるんだけど」

「なんだよ？」

「加奈を励ましてくれないかしら？」

なるほどな。本命はその話だったのか。

「いいけどよ…何すりゃいいかわかんねぇぞ？」

「そうね…遊びにでも誘ったらどうかしら？」

「いきなり誘うのか？　理由も無いのに？」

「そうよ」

まったく…無茶いいやがる。

「まあ、それが一番手っ取りばやいかもしれないが…断られたらどうするんだ？」

「そのときは、私がなんとかするから問題ないわ」

じゃあ、おまえが誘えばいいだろうが。

「おまえが誘えばいいんじゃないか？」

「私ではだめよ。だからあなたに頼んでるんじゃない。そんなこともわからないの？」

こ、このやろう…！　人が親切に話を聞いてやってるってのによ！

「はいはいそうですか。おれが悪かったよ」

「じゃあ、今日の放課後に加奈を誘ってね？」

「は！？　今日！？」

「そうよ。善は急げっていうじゃない」

「マジでか…」

「じゃあ、よろしくね」

用件だけおれに押し付けて、秋吉は教室を出ていった。

放課後。帰る準備をしている宮下を見つけた。教室の入り口から宮下を呼ぶ。宮下はおれの方を見た後に、秋吉と少し話してから、おれのところまで来た。

「あ、あのさ…今度の日曜日…なんか予定あるか？」

「え？…別にないけど？」

宮下はきょとんとした顔で答える。今さらだが、よく考えると女子を遊びに誘うとか何してんだろうなおれ。だめだ…意識するとうまく話せない。

「な、なら、二人でどっか遊びに行かねえか？　たまの休みくらい、思いっきり遊びたいしさ」

「え？　わたしと？」

「そ、そう、宮下と」

明らかにろれつがまわってない。宮下は少し考えているみたいだ。

「うん、いいよ」

「え？　いいのか？　やったぜ！　じゃあ、日曜の朝九時に公園に集合な！」

「うん、わかった。　いつも集合に使ってるあの公園ね」

「そうそう。じゃあ今度な！」

「うん、じゃあね」

宮下と別れてから、おれは部活に行った。みたか秋吉！　おまえの助けなんて必要なかったぜ！

部活が終わって、今日は一人で帰る。まさか宮下が須藤を好きだったなんてな…。あいつのどこがいいんだか。まあ、見た目はそれなりだけどな。なんだか自分でもよくわからないイライラを抱えておれは帰宅した。

第2話（後書き）

謎がひとつ解けた！　という感じにしてみました。

第3話

日曜日。待ち合わせの時間よりそれなりに早く公園についた。なんでおれはこんなにはりきってるんだろうな。

しばらく待っていると、宮下がやってきた。

「おはよう、雅人くん」

「よう宮下。…で、なんで秋吉までここにいるんだ！？」

「あら？　私がいっしょじゃ不満なの？」

「いや…そうじゃなくてだな…」

…なんで秋吉がいるんだろうな。この間は、私じゃだめなの、とか言ってた気がするんだけどな。

「お願い雅人くん。しずるちゃんもいっしょに行ってもいい？　三人の方がもっと楽しいと思うのだから…だめかな？」

「！　…わ、わかったよ。宮下がそこまでいうんなら…混ぜてやってもいいぜ」

しまった…秋吉の同伴を了承しちまった…ってなんでおれは落ち込んでんだ？

「ほんとに！？　よかったねっ！　しずるちゃんっ！」
「ええ。ありがとう、加奈。…そして、チンチクリン」
「…てめぇやっぱつれていかねぇ！」
　こいつ何しに来たんだよ。
「つれていってもらわなくても結構よ、勝手について行くから。最初からそのつもりだったし」
「このやろうぉ…！」
　じゃあどうしておれに宮下を誘わせたんだよ！　意味わかんねぇし！
「な、なかよくしようよ二人とも～！」

　その後、とりあえず行きたいところを考えながら三人で駅に向かった。すると秋吉が「ちょうどいいところに遊園地の割引券が―（棒読み）」とか言い出した。…ぜってぇこいつ最初から遊園地に行くつもりだったな。
「じゃあ、遊園地でいいか？　秋吉が割引券持ってるしな」
「うん、いいよ」
「加奈がいいならいいわ」

いや秋吉おまえ最初から行くつもりだっただろ。

それからしばらくして遊園地についた。

「うわぁ…人がいっぱいだね」

「そうね。人がゴミのようだわ」

「…よし、入るぞ」

「あら、スルー？　つれないわね」

「いちいちかまってられるかっ！」

秋吉のしょうもないボケにいちいちツッコミをいれるほどおれも暇じゃない。

三人分のチケットをおれが代表して買う。園内に入ろうとしたところで秋吉に小声で話しかけられた。

「ちゃんと加奈を元気づけてね。じゃないとどうなるか…わかるわよね？」

どうなるのかわからなかったがおれは首を縦に振った。ほんとにこいつ何考えてんのかわかんねぇ…。

「どれにする？」

秋吉が地図を広げて宮下に尋ねている。

「じゃあまずは…コーヒーカップ！」

「えっ！？　最初にコーヒーカップにのるのか！？」

「嫌なら紀野君は来なくていいわよ。さあ行きましょう加奈」

「お、おいっ！　ちょっと待てよっ！」

あれ？　誘ったのおれだよな？

コーヒーカップにのった後も、いくつかのアトラクションで遊んだ。

「ちょ、ちょタンマ！　もう無理だ！　休ませてくれ！」

「何よ、男のくせに弱々しいしいわね。それでも運動部なの？」

「う、うるせぇよ！」

おれはもう疲れていた。少し休みたい。

「わたしはいいよしずるちゃん。それに、もうお昼すぎちゃってるし。わたし、おなかすいちゃった」

「そうね、わかったわ加奈。それじゃあ少し遅いけど、お昼にしましょうか」

「…なんなんだろうな…この扱いの差は」

とりあえず昼食をとるためにレストランや売店のあるところに向かう。歩いていると、秋吉が立ち止まった。

「ん？　どうした？」

秋吉は向かっている方とは逆の方向を見ていた。

「いえ、気のせいだったみたい」

「？」

何か気になることでもあったのか？

「ふたりともはやく～！」

前を歩いていた宮下がおれたちを呼んでいる。

「おう」

「今行くわ」

「…なあ、ここにあったたこやきがなくなってるんだが…何があったか知らないか？」

「さあ…自分の食事に気をとられててよくみてなかったわ」

「わたしもみてなかったからわからないよ？」

……

「…そうか…じゃあ、おまえらのほっぺたについているソースはなんだ？」

「え！？　…なぁんだソースなんかついてないじゃん驚かさ……あ…」

「やっぱり食ったのかよ！　せめておれに一言ことわってから食えよ！」

「だって…おいしそうだったんだもん…」

「！　…いやいやいやだからって勝手に食うなよ」

「うるさいわね。小さなことをいつまでもグチグチ言って、男らしくないわね」

「おまえも食ったくせして何言ってんだよ！　ちょっとはあやまれよ」

「ゴメンネー」

「このやろぉ…」

「ご、ごめんね！　今度はちゃんと食べていいか聞いてから食べるから！」

「な、ならいいけど」

「紀野君のせいでせっかくの食事が台無しよ」

「おまえらがおれのたこ焼きたべるからだろ！　しかもおまえもう自分の食い終わってるじゃねぇか！」

「さあ、食事もすんだことだし次はどのアトラクションに行く？」

「おい！　おれまだ食べてねぇよ！」

「じゃあ、先に行ってるから」

「ちょ待てよ！」

　たこやきが二人に食べられている間に頼んだものを急いで食べてから二人を追いかける

「そろそろ帰る時間ね」

秋吉が言った。空を見ると、日が傾きかけていた。そうか、明日も学校があるんだったな。

「それじゃあ、最後に観覧車にのろう？」

宮下の提案で三人で観覧車にのった。今日あったことを振り返って、おれはどっと疲れが増した。宮下は目を輝かせながら外の景色を眺めていたが、あいにくおれにはそんな余力は残っていなかった。ただ、宮下が元気になったみたいで、おれは今日の目的が達成されてよかったと思った。

帰りに、日が暮れているからと言って、おれと秋吉は宮下を家まで送った。

「今日はありがとう。とっても楽しかった！　また、いっしょに行こうねっ！」

「ああ」

「ええ、そうね」

おれも秋吉も笑って答えた。

「じゃあ、また明日な」

「うん」

「おやすみ、加奈」

「おやすみ、しずるちゃん」

お決まりのあいさつを済ませて、おれは宮下の家を後にした。

……が、

「おまえ家こっちじゃねぇだろ、なんでいるんだよ」

「そんな！　かよわい女の子に夜道を一人で帰れっていうの！？」

「どこがかよわい女の子だ！　てめぇ有段者じゃねぇか！　まあ確かにおまえといえど夜道に女子を一人にすんのは危ないな。けど、そんな理由じゃおまえはついてこないだろ」

「そうね。実は、今日のお礼を言おうと思ってね」

「いいよ別に…」

別にお礼言われるためにしたわけじゃないしな。宮下が元気ねぇのはおれも嫌だっただけだ。

「今日のたこやき、本当においしかったわ」

「そっちかよ！　まさかそんなこと言うためだけについてきたのか！？」

「そうよ」

「ふざけんなぁあああああああああああああ！！」

夜の静寂の中おれの絶叫がこだました。

あの後、秋吉は不敵に微笑んでからさっさと帰って行った。超うぜぇ…。それにしても疲れた…まさか遊園地で遊ぶという行為がこんなにも重労働だったとは…認識を改めないといけないみたいだな。そんなことを考えていたら、疲れがピークに達していたのだろう…おれは早々に眠りについた。

第3話（後書き）

宮下視点にはなかったところも付け足してみました。

第４話

翌日。

「よう、宮下」

「あっ、おはよう雅人くん」

登校している途中で宮下に会った。そのまま二人で学校に向かう。

「昨日はありがとう。すっごく楽しかった！」

「おれも楽しかった！」

「雅人くんってばコーヒーカップにのったあと、もうフラフラだったよね」

「しょ、しょうがねぇだろ！？　秋吉がまわし過ぎなんだよ！　あんだけまわせば誰だってフラフラになるって！」

「あとそれに…」

そのあとも宮下に一方的にからかわれながら歩く。あれ？　宮下…だよな？　まるで秋吉みたいな対応だ。まあ秋吉と違って不思議と嫌な気持ちにはならないけど。

「じゃあ、また今度な」

「うん」

教室の前で別れ、自分の教室に入る。あとから須藤も入ってきた。手荷物を持っていないあたり、もうすでに学校に来てたみたいだ。

あれから何日か経った。この数日間で気づいたことがある。須藤が宮下のことを気にしているということだ。休み時間になると必ず教室から出ていき、宮下のことを気にかけている。ストーカーかよとか思ったが、顔つきがやたらと真剣だった。何かを話そうと思ってためらっている感じだ。てか、須藤のことを観察してるおれもどうかしてるよ…。なんか悩みがあるならおれに頼ってくれても構わないんだけどな。

そんなことを考えていたある日。宮下から買い物の誘いを受けた。宮下と秋吉と須藤とおれと、なんでかおれの妹の未織（みおり）とで行きたいらしい。

「え？　今度の祝日に未織もいっしょにショッピングに行かないかって？」

「うんっ」

「い、いいけどよ…なんで未織まで誘う必要があるんだ？」

「そ、それは…お、大勢の方が楽しいからだよっ！」

「あ、ああ…そうか…。じゃあ、未織に伝えとくよ」

よくわからんがすごい勢いだ。

「よろしくねっ」

そう言って宮下はさっさと去っていった。

家に帰ると未織がすでに帰宅していた。おれはさっそく今日宮下からうけた誘いを未織に話した。

「え？　お姉ちゃんたちとショッピング？」

なんでかはわからんが、こいつは宮下のことをお姉ちゃんと呼んでいる。

「ああそうだ。おまえどうする？」

「もちろん行くに決まってるよ！　このメンバーだと、お兄ちゃんは荷物持ちに抜擢（ばってき）されたみたいだね！」

「どういう考え方したんだよ！」

い、いや…もしかしたらそうかもしれんな…。

「あ、そうだお兄ちゃん。ショッピングのときはちゃんとお姉ちゃんのこと気にかけてあげるんだよ？」

「ん？　まあ、そんなの言われなくてもいつもなんだかんだで世話してるから今さら気にかけてもな」

「はぁあ……」

妹の盛大なため息。なんでそんな哀れんだ目でおれを見るんだよ。

「とりあえず、おまえが参加すること明日宮下に伝えとくから」

「うん、よろしくね」

翌日。未織も参加することを宮下に言ったあと、待ち合わせ場所と時間を決めた。午前１１時に集まって、昼食をとったあと、ショッピングをしたり遊んだりするという予定に決まった。なんだかんだでみんなでどこかに出かけるのは結構好きだったりする。まあ、楽しけりゃなんだっていいってことでもあるんだけどな。ショッピングに行く日がはやく来ないか、おれは待ち遠しかった。

第４話（後書き）

今回はあまり書き足せませんでした。

この第４話は嵐の前のなんとやらな感じで書いているんで、まあいいかな、とおれは思ってたりします。

第5話（完）

「ほらお兄ちゃん起きて！」

んー…。ん？

「…どうしたんだ未織？　そんなにおしゃれして」

いぶかしみ、ため息をつく未織。

「何言ってるのお兄ちゃん。今日はお姉ちゃんたちとショッピングに行く日でしょ？」

寝ぼけてるおれ。時計をみる。

「まだ待ち合わせまで時間あるだろ？」

「その時計、実は遅くしといたっ♪」

にこにこしながら言う未織。と、いうことは…時間やばくね？

「なんでだぁあああああ！」

「…おい」

「何？」

「…まだ誰も来てないんだが」
「早めに着いたからね！」
「…時計遅くしたんじゃなかったのか？」
「え？　なんのこと？」
　携帯の時刻を確認。家にある電波じゃない時計の時刻と寸分たがわない。
「嘘かよ！」
「だってお兄ちゃんそう言わないと準備しないじゃん」
「…なんでそんな嘘ついたんだ？」
「一番に来たかったんだよね！」
　妹のわがままは即ち、おれの貴重な睡眠時間が奪われたことを意味していた。おれはというと、すでに疲れていた。

「お待たせっ！」
「よう、宮下」
「お姉ちゃんおそーい！」

「こんにちは、宮下さん」

宮下が来た。その少し前に須藤は来ている。

「ごめんね未織ちゃん、用意に手間取っちゃって」

笑って未織に言う宮下。この前遊園地に行った時と何かが違う。宮下と視線がぶつかる。

「？　わたし何かおかしなところとかある？」

「い、いや！　全然おかしくないぞ！」

宮下に聞かれて慌てて返してしまった。ふと、一人まだ来ていないことが気に掛かった。

「それにしても、秋吉のやつ遅ぇな」

「え？　まだしずるちゃん来てないの？」

「私ならここにいるわよ？」

「「うわっ！？」」

急に秋吉が出てきて宮下と同時に驚いた。

「ど、どこから出やがった！？」

「何よ、人を化け物みたいに。ずっとそこにいたわ」

そう言っておれたちから死角になっている場所を指さす秋吉。

「…いつからいたんだ？」

「んー…紀野君が未織ちゃんといちゃいちゃしながら来たところから？」

「いちゃいちゃしてねぇよ！　しかも、おもいっきり最初からいたんじゃねぇか！」

「だから言ったじゃない、ずっとそこにいたって」

「何のためにそんな…」

「何のためって…からかうために決まってるじゃない」

さも当然といった顔で答える秋吉。呆れてものも言えない。

「こんにちは、秋吉さん」

場を仕切りなおすためか、秋吉に話しかける須藤。

「しずるさん！　こんにちわです！」

それに続いて未織も秋吉にあいさつする。そして未織は秋吉におもいっきり抱きついた。きちんと受けとめる秋吉。

「みんなそろったみたいだし、何か食べようか」

須藤が食事を勧める。

「そうだな。秋吉なんかに構ってないでさっさと…っておい！　おれをおいてくな！」

この間の遊園地といい、どうしておれを無視するんだ。

建物の入り口から移動して、手頃なファーストフード店に入って食事を済ませ、そこらへんの店を回っていく。

「会った時から思ってたんだけど、秋吉さんが髪留めしてるなんて珍しいね」

「そうそう。それに、その髪留めかわいいね」

「しずるさん、すごく似合ってます！」

須藤の発言をきっかけにして、宮下とと未織が続いて言う。

「そう？　ありがとう」

秋吉は少し嬉しそうだ。純粋に喜ぶなんて、珍しい。

「ほんとだな…気づかなかった」

おれは秋吉の髪留めにまったく気づかなかった。

「そんなだから紀野君はいつまでたっても…」

哀れむように言って、途中で言葉を切る秋吉。

「な、なんだよ！？　言いたい事があるならはっきり言えよ！」

さっきとは一転して冷めた目でおれを見る秋吉。

「なんでもないわ。気にしないで」

満面の笑みで言う秋吉。…全然笑ってる気がしないんだけどな。

「そうだわ。紀野君、ここの店の服着なさい」

あるお店に入ると、何か閃いたらしい秋吉が、おれにここの店の服を着るように勧める。

「…おまえはバカか？」

おれたちが今いる店は、女性用の服だけを売っている店だ。

「え？　どうして？」

「何不思議そうな顔してんだ！　この店の服は女物だろうが！」

「そうよ？」

「わかってるなら、な・ん・で・おれに着せようとするんだ？」

「いいからとりあえず着なさいよ」

「よくねぇよ！」

秋吉の無茶苦茶な要求に抗議すると、秋吉は宮下のところに行った。なんかこそこそ話している。と、秋吉が宮下を連れてきた。

「あの…わたし、雅人くんが女の子の格好してるのみてみたいなぁ…なんてっ」

「！　ほ、ほんとにみたいのか？」

まさか宮下にまで言われるとは思ってなかった。

「う、うん！」

宮下が首を縦に振りながら答える。秋吉を見ると…なんかおれ睨まれてるんだけど？

「…わかった。着てやるよ」

…これよりもさらにひどいことになるかもしれないのでおれは折れることにした。なんでこうなるんだ…。

「これなんかどうだ？」

「さすがね須藤君。用意がいいわ」

さっそく須藤がもってきた服を試着させられる。

「お兄ちゃんすっごく似合ってる！　あははっ！」
「紀野。おまえって、そんな隠れた才能があったんだな…」
「雅人くん、かわいいよ！」
「さすがね、紀野君」
　みんないろいろ褒めているみたいだが、ちっとも嬉しくない。
「な、なんか足がスースーするな…」
　おれが今着ているのはワンピースだ。下半身がすーすーする…。
「じゃあ今から紀野君は、この格好のままお店をまわるわよ」
「は！？」
「すいませーん。これくださーい」
「えっ！？　ちょ待てよおま…」

　おれにメイクを施すらしい。秋吉と宮下と未織は化粧品を買いに行った。その間おれは須藤といっしょに待つことになった。周りのお客さんやら従業員さんやらがチラチラこっちをみているのがとても気になる。

「…しかし本当は女だったとはな」

半笑いでいう須藤。

「男だっつうの！」

「本当の自分をさらすのはいいことだぞ？」

「この格好で恥以外何をさらせと？」

「おまえ生まれてくる性別間違えたんじゃないか？」

「うるせえよ！」

そうこうしているうちに、三人が戻っってきた。

「動かないでよ…」

秋吉がおれに命令する。秋吉と宮下が交互にメイクを施していく。

「よし出来た！　はい！」

「「お～！」」

須藤と未織がおれの顔面を見て驚く。

「え？　おれ今どうなってんの？」

みんなが一斉に写メを撮りだす。

「撮るなぁ！」

おれの制止の声も空しく携帯におれの画像が収められる。秋吉に至っては連写してやがる。

「で、おれ今どうなってるんだ？」

「紀野君にはみせないわ」

「は？　なんでだ？」

「だって、そのほうがおもしろいじゃない」

「…おまえなあ」

そのあともおれは女の子の格好のまま、みんなで建物内のゲームセンターにいった。遊んでいるとき、まわりの人たちの視線が痛かった。

「そろそろ帰る時間ね」

秋吉がみんなに向けて言う。

「今日はすっごく楽しかったです！」
「そうだね」
「わたしも！」
「ええ、そうね」
未織の感想に、須藤、宮下、秋吉の順に答える。
「…おれはどう言えばいいんだ？」
「雅人くんは、楽しくなかった…？」
「ま、まあ楽しかったけどよ…」
「じゃあ、帰りましょうか」
そう秋吉が言って、みんな帰ろうとする。
「ところで紀野、その格好のままで帰るのか？」
「え？…ああ！　す、すぐに着替えてくる！」
須藤が気づいておれに言った。おれは近くの服屋さんにダッシュ。…慣れって恐ろしいな。
「あと少しだったのに…」
「秋吉！　てめぇ覚えてろよ！」

おれは急いで着替えて戻り、みんなで帰った。

まったく…今日も散々な日だった。みんなでおれを女装させやがって…。だけど、なんだかんだ言ってもおれは、こんなやつらのいるところにいたいんだと思った。

第5話（完）（後書き）

これで紀野編はおしまいです。

自分の気持ちに気付いてないようにしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4647i/

紀野雅人のいたいところ

2010年10月10日06時48分発行